

子どもの本を集めた人 ～戦前期ドイツの四人のコレクターについて～

佐藤和夫¹⁾

Vier Kinderbuchsammler in Deutschland vor dem II. Weltkrieg

Kazuo SATO

要旨

ドイツでは二十世紀前半まで子どもの本に関心を持つ人は少なく、収集されることもほとんどなかった。そうした中であって例外的に子どもの本を収集した人たちがいた。カール・ホブレッカー、ヴァルター・ベンヤミン、アルトゥール・リューマン、ヴァルター・シャツキの四人である。ベンヤミンは文芸批評家として、リューマンは美術史家として、シャツキは書籍商としてそれぞれの専門的な観点から本の収集を行った。ホブレッカーは技師であり、文芸や図書の専門家ではなかったが、他の三人を凌駕する最も多くの子どもの本を収集し、看過できない存在となった。さらに彼は自分の収集を元に興味深い子どもの本の歴史の執筆にも手を初めている。後に一人の女性図書館員による詳細で網羅的な児童文学史が生み出されるが、この記述の基礎になったのがホブレッカーの築いた膨大なコレクションだった。以下においては子どもの本を集めた四人、とりわけカール・ホブレッカーを中心に報告する。

ABSTRACT

Bis zur ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts hatte man in Deutschland fast kein Interesse, Kinderbücher zu sammeln. Unter diesen Umständen begannen vier Personen ausnahmsweise eine Sammlung von Büchern und Heften für Kinder und Jugendliche zusammenzutragen: Karl Hobrecker, Walter Benjamin, Arthur Rümman und Walter Schatzki. Benjamin als Literaturkritiker, Rümman als Kunsthistoriker und Schatzki als Buchhändler sammelten die Bücher in sachverständiger Hinsicht. Obwohl Hobrecker Ingenieur, und nicht Fachmann für Literatur war, konnte er die größte Kollektion der Kinder- und Jugendliteratur zusammenstellen. So mussten die drei anderen auf Hobreckers Tätigkeit achtgeben. Zudem ließ seine Sammlung ihn eine interessante Geschichte der Kinderbücher schreiben und führte dazu, dass eine weitere größere Geschichte der deutschen Kinder- und Jugendliteratur von einer Bibliothekarin entstand. Dieser Aufsatz soll über die vier obengenannten Kinderbuchsammler, besonders Karl Hobrecker einen Bericht geben.

1. ドイツの子どもの本のコレクター

今日では子どもの本は各地で、それぞれいろいろなやり方で多数収集されている。例えば、上野にある国際子ども図書館のサイトからは大学や公共図書館に収蔵されている子どもの本のコレクションがどれほど多くあるかを確認できる。子どもの本は大学や公共図書館によって、あるいは本好きな個人によって収集されているが、その独自の意義が認められたのはそう古いことではない。ドイツの場合「児童文学」(Kinder- und Jugendliteratur)として、つまり独自のジャンル

として確立するのは第二次世界大戦以後である。それ以前はサブカルチャー的な、一般文学に比べて一段低いものとして扱われており、公共図書館や大学図書館が系統立って収蔵することはなかった。

このようにまだ一般的に価値が認められていなかった時期に近代の子どもの本を集めた人としてドイツでは以下の四人が知られている。

- (1) ヴァルター・ベンヤミン (1892-1940)
- (2) カール・ホブレッカー (1876-1949)
- (3) アルトゥール・リューマン (1888-1963)
- (4) ヴァルター・シャツキ (1899-1983)

¹⁾ 放送大学茨城学習センター 所長

1.1. ヴァルター・ベンヤミン

ベンヤミンはベルリンの裕福なユダヤ人家庭に生まれた。しかも「ベンヤミンの家は桁が違い、ベルリンでも十指に入る財産家だった¹⁾」。ベンヤミンが生まれた頃のドイツの労働者の平均年収は650ライヒスマルクだったが、彼の父は自分の8人の子どもたちそれぞれに10万ライヒスマルクを洗礼祝いに贈ったという。ベンヤミンは抜群の知性の持ち主で、文芸や思想・哲学の分野で優れた論考を数多く残したが、その一方で生活能力には欠けるところがあり、父の経済力に依存し続け、父が第一次世界大戦後のインフレで没落してから初めて職業として大学教員を目指した。しかしながら、彼の研究論文は当時の学者・研究者にとって難解すぎたため、博士論文は何とか受理されたものの、その一段上の教授資格請求論文は受け入れてもらえず、大学教員としての道を断念した。もっともたとえ論文が受理されたとしても「哲学や、理科学の学問ならいざ知らず、ドイツ・ナショナリズムの温床であり、プロテスタント系で固めたドイツ文学科のポストにユダヤ人のベンヤミンがつけるわけがなかった²⁾」のである。

それはともかく子どもの本の収集はベンヤミンの先見性を物語るものでもあり、楽しみでもあった。クラスメートだったエルンスト・シェーン（1894-1960、音楽家、作家、翻訳家）に宛てた手紙の一節にはこう書かれている。

「シェーン君、誕生日への祝詞、ありがとう。ぼくの誕生日は、きみに本の話をするいい機会になった。というのは妻がぼくに、ちょっとしたライブラリーを——本棚ごと、というわけじゃないが、小さな本棚ひとつにずらりと並ぶくらいの本を——贈ってくれたからなのさ。まずいっておかねばならない、ぼくは本の本物の収集家らしく、専門分野を——少なくとも——ひとつつつくっている。その際第一に考慮されたのは、すでに持っている本と、ふところ具合だった。それは、こんにちでもまだ一般的には収集がなされていない分野なので、そこでは掘出物がまだ可能なのだ（じじつ最近ぼくは掘出物を見つけて、いいようもなく嬉しかった）。つまり昔の子どもの本、童話、それに伝説の本を、ぼくは集めている。コレクションの根幹になったのは、ぼくが母親の書棚、ぼくの幼時の書棚からごっそりと、うまいときに掠めてきたものだ。[後略]³⁾

このコレクションの中身は主にメルヘン、伝説、物語で、母親の本棚には200～300タイトルあったそうである。ベンヤミンが子どもの本に関心を示した1920年代はドイツでもエーリヒ・ケストナーの「少年探偵もの」やベルトルト・ブレヒトの「教育劇」が作られたが、ベンヤミン自身は同時代の作品には関心を持たな

かった。文字通り彼の目にはなつたのは十九世紀の彩色画入りの子どもの本だった。

1.2. カール・ホブレッカー

(後述)

1.3. アルトゥール・リューマン

リューマンはもともと美術史の専門家で、本のイラスト（挿絵）の歴史を専門的に研究し、本のイラストに関する、多くの著作を残している。出発点はフランスの風刺画家オノレ・ドーミエ（1808-1879）である。

リューマンの関心は十八世紀、及び十九世紀の著名な挿絵画家が関わった子どもの本だった。従って彼が収集したのは近代に多数出版された子どもの本のうち、質の高い挿絵を掲載したもの、装丁に特色のあるものであった。その中でも特に深い関心を寄せたのは

- 1) ABCの本（初等読本）
- 2) 汎愛主義者の主要著作
- 3) 画家テーオドア・ホーゼマン（1778-1845）

だった。

リューマンの子どもの本の収集は、彼が編集・出版した『昔のドイツの子どもの本』（“Alte deutsche Kinderbücher”, 1937）で知られるようになった。この本には

- 1) ドイツ語圏の児童文学の短い歴史（37頁、うちカラー図版4頁）
- 2) 文献リスト（368タイトル）
- 3) 多数の挿絵（小品のカットを除き全頁大の図版が161タイトル、1頁に2点示されているのが1タイトル、2頁分あるのは6タイトル）

が収められている。

ただリューマンのコレクションのうち、実際に彼自身が直接収集したのは少数で、それよりもかなり多くがヴァルター・シャツキ（リューマンの友人でもあった）から譲り受けたものだった。リューマンは上掲書において以下のように感謝の意を表している。

「著者の研究に最も重要な材料を提供してくれたのはカール・ホブレッカーの率いるベルリンの国立児童図書館とフランクフルトの古書店主ヴァルター・シャツキであった。両氏の親切な助力に感謝申し上げる。とりわけシャツキ氏には文献目録改定への多大な貢献と豊富に所持するイラストを譲渡いただいたことに厚く謝意を表するものである。⁴⁾

1.4. ヴァルター（ウォルター）・シャツキ

シャツキは亜鉛メッキ工場の技師の子として生まれた。四人の兄弟はどちらかと言えば、理系の人たちだったが、ヴァルターは商人としての道を歩んだ。第一次世界大戦後大学生となったシャツキは経済学を学ぶ

¹⁾ 三島憲一『ベンヤミン』、講談社、1998年、26頁

²⁾ 同上書、221-222頁

³⁾ 『ヴァルター・ベンヤミン著作集14 書簡I 1910-1928』、野村修訳、晶文社、1975年、102-103頁

⁴⁾ Rümman, Arthur: Alte Deutsche Kinderbücher. mit Bibliographie u. einhundertfünfzig Bildtafeln, Wien/Leipzig/Zürich 1937, S. 7

一方で二十世紀初頭に流行したワンダーフォーゲル運動にも親しみ、本好きであったことから夏休みにはお祭りで書籍を販売する団体でアルバイトをした。彼には自転車に新刊と中古の本を積んで移動販売をする仕事が割り当てられた。もともとヴァイオリンが趣味であった彼は弾き語りで人を集めて売りさばいた。夏休みを終えるとシャツキはその団体の内勤となって書籍販売のスキルを磨いていった。

やがて祖母が亡くなると孫たちに財産が分与され、シャツキはこの資金を元に1920年、二十歳の時にフランクフルトの中心街に自前の書店、“Jugendbücherstube”（「子どもの本の部屋」）を開いた。屋号が示すように子どもと若者向けの専門書店であり、ドイツでは嚆矢と言ってよい。次いで稀観書部門も開設した。本を求める旅の途上で、子どもの本が正当な評価を受けずに廉価で取引されていることに気づき、これがきっかけで昔の子ども本の収集も手がけるようになった。子どもの本の収集家はまだ少なく、コレクションを始めるには都合がよかった。

1920年代にシャツキの書店は一般書も扱うようになり、フランクフルトの有力な書店へと成長した。ところが1930年代初頭の不景気のため彼の収集品、692タイトルはニューヨーク公共図書館に売却される。そこからシャツキは再び収集を開始した。この第二のコレクションを元に編集出版されたのが前述のリューマンの『昔のドイツの子どもの本』である。

2. 収集家たちの中心、カール・ホブレッカー

2.1. 子どもの本を収集し、研究する技術者

カール・ホブレッカーは1876年にドイツ西部の工業経営者一族の三男として生まれた。実科ギムナジウムを経てローザンヌ、ゲッティンゲン、フライブルクの各大学で化学を学んだ後、光化学の道に進み、これが彼の専門的な職業となった。

1906年ホブレッカーはマルガレーテ・リープレヒトと結婚する。（この時、カール30歳、マルガレーテ31歳）。彼女の家も農場と工場を経営しており、経済的には裕福であった。その後彼はセルロイド工場を経て軍事技術大学の光化学の技術者として勤務し、この二度目の長期にわたるベルリン滞在中に子どもの本の収集が始まり、それが彼の人生の目的となった。

ただ単に買い集めるだけではなく、自ら研究することで子どもの本の歴史について幅広い豊富な知識と見解を身につけ、質の高い子どもの本の収集を行っている。従って自分のためのみならず、他の人の研究を支援することもできたのである。

ホブレッカーは前述のように化学を専攻した光化学分野の技術者だったが、この自然科学の知識と体験も一定の方針の下に系統立てて現物を収集し、整理する

背景となっているように見える。彼はこうした子どもの本の体系から得た幅広い知識・見識を一般向けの文化雑誌を中心に教育や心理の専門雑誌にも発表している。また古い絵本、メルヘン、物語の再刊（グリムやカンペの他にもクーパーの『皮脚絆物語』やストウ夫人の『アンクル・トムの小屋』にも関わっている）に努める一方、絵本の創作にも携わった。

2.2. 児童文学史事始め

ホブレッカーが自分の収集した本を基に子どもの本に対する見方・考え方を事例に則して楽しくおしゃべりをしてくれているのが、彼が1924年に出版した“Alte vergessene Kinderbücher”⁵である。

この本について語ることはドイツの児童文学史から見て非常に意義深いことであるが、日本ではほとんど注目されてこなかった。幸いこの本の翻訳が日の目を見てこの四月に、出版された。詳しくはそちらを参照願ひ、ここではごく簡単にホブレッカーおじさんの「おしゃべり」を紹介するにとどめておく。

2.2.1. まずは「一年生」から

始めに紹介されるのは「初級読本」である。どこであれ、本の世界へ入って行くにはまず文字を覚えなくてはならない。ドイツだから当然「アルファベット」だが、本書出版当時頃までドイツのアルファベットはラテン文字ではなく、同書の図版を見ればわかるようにドイツ文字（亀の子文字）である。これをどう覚えてもらうか、さまざまな工夫がこらされた。シュピーリの『ハイジ』でもハイジがこの文字を覚えるのに大変苦労している様子が描かれている。

2.2.2. 「目で見る」—絵による教育

けれども字だけで子どもたちを読書に導くことはできない。ホブレッカーは遊びの要素の大切なことを力説し、その先駆者としてヨハン・アモス・コメニウス（1592-1670）の名を挙げている。コメニウスは汎ヨーロッパ的知識人であり、彼が教育上果たした役割も極めて重要だったのである。

2.2.3. 「楽しい教科書」

「楽しい教科書」で最初に掲げられているのは礼儀作法である。楽しくなさそうだが、ホブレッカーに言わせれば、韻を踏んだ詩形式の言葉遊びがおもしろいのだろう。ともあれホブレッカーは子どもを教育するに当たっては笑わせ、生き生きとした調子で楽しませることを何よりも願っていた。

2.2.4. 「娯楽読み物の先駆者たち」

ここでは聖書、聖書物語、イソップ寓話という流れで紹介されている。ただそれらに子どもが引きつけられたのは挿絵であって、内容は読んで聞かされるものだった。中でもホブレッカーが注目するのは寓話作家のブルカルト・ヴァルデイス（1490頃-1556）と動物叙事詩を書いたゲオルク・ロレンハーゲン（1542-

⁵ 直訳すれば『昔の忘れられた子どもの本』となるが、拙訳では原文における語り口の意を汲み取って『ホブレッカーおじさんのおしゃべり』とした。本報告末尾の文献表参照。

1609) である。

2.2.5. 「民衆本」

活版印刷が十五世紀中頃に実用化されると、粗悪な紙に印刷された英雄や騎士の物語（困難な愛の実現も含まれる）、滑稽譚、妖精の登場する不可思議なお話が「民衆本」として普及してくる。ゲーテを始め昔の子どもたちは年の市で買ってもらい、『ヨハネス・ファウストゥス博士』の最後に身をすくめたり、『ティル・オイレンシュピーゲル』のいたずらを楽しんだりしただけではなく、『キツネのライネケ』の下品な世界も覗きこんだのだった。

ホブレッカーがとりわけ民衆素材として好んだものは「なぞなぞ」であった。子どもにも好まれるものとして「最も古い児童文学の中に気持ちの良い花を咲かせた」⁶とまで言っている。もちろんメルヘンについても言及している。読むメルヘンの出現がイタリアやフランスにかなり遅れたことを残念がりながらも、ゲルマン民族は純粋さと深みのあるメルヘンを作り出したと誇らしげに語っている。

2.2.6. 「歌」

子どもにとって歌の始まりはやはり「子守歌」である。素朴で生活に根づいた歌はやがて道徳臭が強く漂う時代が長く続く。「歌」もメルヘン同様にドイツは数多くのもを生み出してきた。ただ童謡集となると18世紀以前のはあまりなく、ホブレッカーも「18世紀末の童謡集で十分」と言っている。

2.2.7. 「新しい児童文学の創造」

十八世紀後半から子どもを意図した作品の出版は次第に増えていく。理由の第一は啓蒙思想の普及であろう。これは言うならば、盲目的な神への信仰から、人間の知的な判断を信頼することへの転換だった。確かな判断をするには十分な知識がなければならない。十分な知識を得るには周到な学習が必要であるし、そのためには早期からの教育が欠かせない。こうして啓蒙思想に裏打ちされた一群の教育者たちが出現する。彼らはフランスの思想家、ジャン・ジャック・ルソー（1712-1778）の影響を強く受け、その運動は「汎愛主義」と呼ばれている。汎愛主義の教育者、ヨーハン・ベルンハルト・パーゼドー（1724-1790）、クリスティアン・ゴットヒルフ・ザルツマン（1741-1811）、ヨアヒム・ハインリヒ・カンペ（1746-1818）らは子どものために多数の本を出版した。

2.2.8. 「世界文学と古典作家たち」

ホブレッカーが世界文学として位置づけているのはデフォーの『ロビンソン』（原作、1719年。十八世紀後半以降さまざまに模倣される）やスウィフトの『ガリバー』（原作、1726年。ドイツ語版、1727以降）を含む誰でもよく知っている作品群である。ホブレッカ

ーは収集家としてこの時代のもを丹念に集めて整理した。ここで語られるのは、たくさん出版されているにもかかわらず、たやすく忘れ去られてしまった、との嘆きである。彼の嘆息は1933年の政治変動と大きく関わっている。その点については後でまた触れることにする。

2.2.9. 「見た目」

昔の本は大人のためのものであれ、子どものためのものであれ、大きさは「八つ折」⁸で、表紙の厚紙は緑色、あるいは茶色であったため地味で目立たなかった。ところが1820年頃から、「見た目」が大きく変化する。この変化が起きるのはドイツの文化史や文学史で「ビーダー・マイヤー」と称される頃である。ナポレオン戦争が終わり、旧体制に復帰した1815年頃に始まって、この復古体制が揺らいだ1848年までの時代を指す。人々は外の騒がしさを避け、室内の居心地、とりわけ優美な家具を好んだ。本の装丁の見た目が良くなったのもこうした傾向と無関係ではないと思われる。同時に本文中の見た目も大幅に改善されたが、外見と内容が釣り合っているとは限らなかった。

2.2.10. 「古典的児童文学作家」

「古典的児童文学作家」と表題に掲げると、定評のある児童文学作家を取り上げているように見えるが、そうではない。多作で、現役の時は大きな影響力をもっていたものの、その後忘れられてしまった作者たちのことを指している。

2.2.11. 「躍進」と「黄金時代」

ホブレッカーは「躍進」の章では挿絵に重きを置きながらも、作家、とりわけ女性作家の活躍、出版社の活動、そして児童文学の広がりについて述べている。「黄金時代」の章でも児童文学にとって重要な画家、作家、出版社の活動と読者にとっての幸せな、つまり「黄金時代」を「ホブレッカーおじさん」は楽しそうに語り続けている。

2.2.12. 愛される「ロングセラー」

そして最後の山場は「ロングセラー」である。この章では誰でも知っている『ロビンソン』や『ガリバー』の他に、ドイツの人に長く愛された子どもの本が取り上げられている。特に「ホブレッカーおじさん」が愛してやまなかったものはフランクフルト・アム・マインの医師、ハインリヒ・ホフマンが我が子のために書いた、『もじゃもじゃペーター』だった。これはユーモラスで恐ろしい文章と絵で子どもたちの関心を強く引きつけた型破りの本で、従来の絵本のイメージを一新した。

この本とともに「絵本の時代が始まり、[中略] 児童文学の建物も堂々たる」⁹ものになったのである。

⁶ ホブレッカー、カール『ホブレッカーおじさんのおしゃべり ドイツ児童文学史事始め』、74頁

⁷ 同上書、86頁

⁸ 八つ折は全紙を三度折りたたんで八分の一の大きさにしたもの、大は縦25cmから、小は18.5cmまでの差があった。おおよそB5～B6くらいの大きさ。

⁹ ホブレッカー、前掲書、166頁

2.2.13. 「補遺」と「結びの言葉」

ここまで語った後、「ホブレッカーおじさん」は言い足りなかったことを「補遺」として幾分つけ足した。本の判型や雑誌、演劇、料理についても言及する。そして

「[前略] 真心を込めて仕事に打ち込み続けました。ですからある人には刺激を、別な人には思い出を、また別な人には私の提供した美しいものにうっとりとして日常を忘れる時間を、といった具合にながしかのものを提供できたのではないかと考えています。」¹⁰と結んで満足げに彼のおしゃべりを終えている。

2.3. 苦難の後半生

十九世紀後半のドイツは、ナポレオン率いるフランス軍に惨めに敗れた世紀初頭とは異なって、プロイセンを中心として戦争に勝ち続けた。産業革命の波にも乗り、著しい経済成長を遂げ、人口も急激に増えていった(1871年：約4,100万人、1914年：6,780万人)。ホブレッカーが子どもの本を収集できたのも成長する産業ブルジョアに連なる人だったからとも言える。

ところが二十世紀初頭のドイツは第一次世界大戦で国力を著しく消耗したあげく結局負けてしまう。そして前世紀後半とは逆に巨額の賠償金の支払いを迫られた。その上経済政策にも失敗し、ハイパーインフレに陥る。ホブレッカー夫妻もこの苦境を免れることはできず、所蔵する12,000冊の児童図書を寄贈することと引き替えに、受け入れ先の終身学芸員の地位を得ようとする。けれども事はそう簡単には運ばなかった。

ゲーテンベルクの故郷として知られるマインツ(ラインラント・プファルツ州の州都)の国際教育研究所に国際児童図書部門を設立し、そこに蔵書とともにホブレッカー夫妻も移る計画は1932年の秋に実現寸前までいったが、結局実らないまま1933年を迎えた。この年の1月にナチスが政権に就くとホブレッカーの交渉先は否応なくナチスの青少年部門(ヒトラー・ユーゲント)となり、責任者であったバルドゥーア・フォン・シーラハ(1907-1974)に接近することとなった。

ナチス指導部の力を借りたことでホブレッカーは長年の夢であった児童図書専用図書館が実現し、そこで働くこともできるようになった。けれども彼の子どもへの本への素朴で「善良な」愛は、ナチス体制に進んで入ったことにより、深く傷つき評価を落とすこととなった。そのためかホブレッカーに関する研究は盛んとは言い難く、散発的になされているにすぎない。子どもの本はますます注目されているが、ホブレッカーの方はほとんど「忘れられた」状態にある。

1939年9月にドイツ軍がポーランドに侵攻したことで第二次世界大戦が始まった。当初の破竹の勢いもしだいに弱まり、開戦1年後には首都ベルリンもイギリス空軍の空襲にさらされるようになった。こうして戦争が激化する中、1943年の11月にホブレッカー夫妻の

住んでいたイン・デン・ツェルテン(ベルリンの中央部にあったかつての地名)の住居も爆撃により破壊されてしまった。

住まいを失った後の一年間をどう暮らしたかについても含めこの時期以降のホブレッカーについてはよくわからない。というのも避難する際に自分の写真、手紙、著作を処分してしまったからである。ともかくホブレッカー夫妻は1944年末に東部の縁戚を頼ってベルリンを離れるが、この方向への避難は甲斐が無くロシア軍から逃れるために結局ヴェストファーレンへと戻り、ここで二人は終戦を迎えることとなった。その翌年にはホブレッカーは妻を失う痛手を被るが、子どもの本への情熱はやむことなく、死の前年の1948年に50頁にも満たない薄い本ではあるが、大好きな「なぞなぞ」の本を出版している。

3. コレクションの今

3.1. ベンヤミンによるコレクション

1933年、ベンヤミンはユダヤ人であったためパリへ亡命を余儀なくされた。1940年にはパリもドイツ軍に占領されたため、さらにスペインへ逃れようとするが、途中(ピレネー山中)で行く手を阻まれ、服毒自殺をしている。一方ベンヤミンの子どもへの本のコレクションはすでに1930年に別れた妻ドーラの元へ移っていた。ドーラは1930年代にそのコレクションとともに南フランスに移住し、そしてイギリスへと渡った。1964年にドーラが亡くなるとコレクションは息子のシュテファンに受け継がれ、1972年にシュテファンが亡くなるとベンヤミンの義理の娘であるジャネットが相続した。ジャネットは個人で維持する強い意志を持ち、アメリカからのいくつもの購入の申し出に応じなかった。1982年以降フランクフルトの児童図書研究所はジャネットからの買取り交渉を始め、同意を得るのに成功した。これはシュテファンが生前に「ドイツへ戻りたい」との意志を表明していたためと言われている。同研究所とフランクフルトの市立兼大学図書館が共同でまとめた1987年の展覧会用カタログには計204件の図書が記載されている。

3.2. カール・ホブレッカーによるコレクション

3.2.1. ブラウンシュヴァイク大学に収蔵されたコレクション

ホブレッカーのコレクションは戦争末期の避難に続く戦後の混乱で一時行方不明になる。やがてブラウンシュヴァイク郊外の農家で発見されるが、一部は売却されたり、燃料代わりに燃されたりして損害を被った。散逸を免れた書籍も安全とは言えなかった。保管状態が悪かったし、何よりも戦後の非ナチ化政策はナチの協力を得たホブレッカー収集に係る書籍にとって状況は不都合であった。

¹⁰ ホブレッカー、前掲書、185頁

それでもブラウンシュヴァイク教育大学図書館を中心に整備が進められ、危機を脱することができた。1946年以後ホブレッカー・コレクションは同大学の図書館に収蔵され、以下の三つの柱に沿って拡充されていく。

- ①もともとホブレッカー・コレクションであったおよそ5,000冊の本、その中心は十九世紀に出版された書籍。
- ②関連する十九～二十世紀の児童文学文献。ホブレッカー・コレクションにあったものばかりでなく、国立児童図書館、ユージュント指導部アカデミー、及びブラウンシュヴァイク教育大学由来のものも含まれる。
- ③1946年以後ブラウンシュヴァイク教育大学が組織的に集めた児童文学図書。

1971年にブラウンシュヴァイク教育大学と工科大学の図書館は統合された。ホブレッカー・コレクションも新造の大学図書館に設けられた特別書庫に移転をし、文献目録の作成が進められた。

1978年からドイツ研究振興協会（Deutsche Forschungsgemeinschaft）の支援を受け、およそ5年の歳月をかけて1983年に作業を終えている。その成果として2年後の1985年に二つに分冊した、併せておよそ1,200頁に達する大部の目録ができあがった。

登録されたタイトルは総計で8,238あるが、由来がわかったものはそのうち5,584にとどまった。従って2,654タイトルはどのような経路をたどってコレクションに収まったのかははっきりしていない。突きとめられたものの内訳は以下の通りである。

ホブレッカー自身	4,003
国立児童図書館	1,332
ドイツ青少年指導アカデミー	163
青少年指導部中央図書館	72
その他の部局	14
計	5,584

明確に同定できなかったものの、残りもおそらくホブレッカーが集めたものと推定されている。ホブレッカー・コレクションには元々およそ12,000タイトルあったと推定されているので、戦中、戦後の混乱期に約4,000タイトルほどが紛失、散逸したことになる。この目録には児童文学史上必ず言及されるホフマン博士の『もじゃもじゃペーター』が15タイトル記載されているが、散逸前のコレクションには300タイトルあったそうである。

3.2.2. フランクフルト・アム・マインに保管された文献

より小規模なホブレッカー・コレクションとしてフランクフルト・アム・マインの児童図書研究所の所蔵する書籍378タイトル、ゲーム27点がある。これは1979年にフランクフルト市立兼大学図書館が長い交渉の末、相続者であるカール・ホブレッカーの甥から購

入したもので、同市の児童図書研究所に永年貸与されている。ホブレッカーがその『ホブレッカーおじさんのおしゃべり』を書く基礎資料としたものを多く含むとされているが、彼の著書の巻末にある文献表とフランクフルトに保管されているコレクションの重なりはおおよそ四分の一程である。とはいえコレクションのカatalogは体裁をも重んじたホブレッカーの趣向を生かして本の表紙を写真で表示し、コメントを付し、ホブレッカーのみならず、リューマン他の著書の該当ページとの関連をも明らかにしており、親切で丁寧な作りとなっている。

3.3. アルトウール・リューマンによるコレクション

リューマンのコレクションも第二次世界大戦後、ホブレッカーの場合と同様に、行方不明になっていたが、児童図書研究所の当時の所長、クラウス・ドーデラー教授によってその所在が突きとめられた。これはティッセン財団の支援により、ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学（フランクフルト）が相続者よりすべて買い取り、同研究所に永年貸与されている。なお、ティッセン財団は大鉄鋼メーカーの経営者であったフリッツ・ティッセン（1873-1951）を偲んで妻と娘が1959年に設立した学術支援団体で、ケルンにある。

3.4. ヴァルター・シャツキによるコレクション

シャツキもユダヤ人だったので、1937年にロンドン経由でアメリカに亡命している。彼の兄弟たちもみなドイツを離れ、命を長らえることができた。以後シャツキはアメリカで書籍商として活躍し、とりわけオリジナルの楽譜の鑑定力が評価され、彼の手を通じて貴重な楽譜が取引されていった。彼は1941年にそれまでに関わった本のカatalogを“Old and rare children's books”と題してニューヨークの自前の書店から出版している。そのリストはジャンル別に整理され、総数206タイトルが記載されており、うちドイツ語圏の本は64タイトルであり、その他は英・米、仏、オランダで出版されたものである。

4. まとめ

それぞれに子どもの本の収集に情熱を注いできた四人のコレクターについて述べてきた。彼らにはいくつかの共通点がある。幼少時には裕福な家庭に育ち、本へのあこがれを実際に手にすることで満たすことができたし、教育も大学まで十分に受けている。職業の上でも親縁性がある。ベンヤミンは文学研究者であり、子ども文化の批評家でもあった。シャツキは書籍業で子ども向けの本屋を営んだ。リューマンは美術史家で子どもの本の挿絵を丹念に研究している。その中で異色なのがホブレッカーである。彼は技術者であり、子どもの本の世界との直接の関連はない。しかし上述のように彼のコレクションは質量ともに半端ではなく、他の三人のコレクションは一千点に満たないのに対

し、彼は優に一万を超える点数を集めている。実際、他の三人は常にホブレッカーを意識し、彼の収集の恩恵を受けている。

ベンヤミンはホブレッカーを素人扱いしながらも児童文学史をまとめる上で先を越されたことを認めている。

「[前略] ベルリンにいるぼくの競争相手で、達人で、嫉妬心抜きでぼくのコレクションを助けてくれる男が、こんど本を出版した。カール・ホブレッカー著『昔の忘れられた子どもの本』。先日ぼくは書評用に一冊受けとった。老著者の文章はいかにもひとがよさそうで、まじめくさったユーモアがあるが、ときとしてできそこないの菓子に類してくる。掲載された絵は、選びかたにはいくぶん疑問がもたれるけれども、色刷りの仕上がりがみごとだ。ぼくは以前きみに、この本の出版社がぼくの生彩あるコレクションをぼくの家で見たとき、執筆をぼくに依頼すればよかったと残念がったことを伝えたことがあると思う [後略]」¹¹

ホブレッカーが子どもの本の収集を始めたのは結婚後、二度目のベルリン滞在中の、1908年から1910年頃のことと推定されている¹²。シャツキが1923年に意識的に子どもの本の収集を開始する十数年前のことであった。リューマンが収集品の目録を出版したのは1937年だった。彼はナチス時代には出版と公的活動が禁じられ、この書籍が1945年までの最後の著書となっている。

ベンヤミン、シャツキ、リューマンには子どもの本のもつ美術的価値が重視されているが、ホブレッカーにもその点は共通している。ただ彼はそれよりも無邪気に子どもの本を愛し、質ばかりでなく、量も追い求めた。その結果、彼のコレクションからはそれを元に大きな成果、プレスラウ（現ポーランド）の司書、イレネ・ディーレンフルト（1898-?）による詳細な『ドイツ児童文学史』¹³が生み出されたのである。ディーレンフルトの成果についてはいずれ改めて論述したい。

【参考文献】

- Doderer, Klaus (Hrsg.) : Lexikon der Kinder- und Jugendliteratur. 3 Bde. u. e. Ergänzungs- u. Registerband, Weinheim/Basel 1975-1982
- Düsterdieck, Peter (Bearb.) : Die Sammlung Hobrecker der Universitätsbibliothek Braunschweig. Katalog der Kinder- und Jugendliteratur 1565-1945. 2 Bde. München/New York/London/Paris 1985
- Dyhrenfurth, Irene : Geschichte des deutschen Jugendbu-

ches. mit einem Beitrag über die Entwicklung nach 1945 von Dierks, Margarete. Zürich/Freiburg i. Br. 1967

Göbels, Hubert : Nachwort von Hubert Göbels. in : Hobrecker, Karl : Alte vergessene Kinderbücher. Nachdruck der Ausgabe von 1924, Dortmund 1981

Hobrecker, Karl : Alte vergessene Kinderbücher. Berlin 1924 (カール・ホブレッカー (佐藤和夫訳)『ホブレッカーおじさんのおしゃべり ドイツ児童文学史事始め』、青簡舎、2018年)

Mahn, Michael : Karl Hobrecker — ein deutscher Sammler. Herzberg 1987

Rümann, Arthur : Alte Deutsche Kinderbücher. mit Bibliographie u. einhundertfünfzig Bildtafeln, Wien/Leipzig/Zürich 1937

Schatzki, Walter : Children's Books old and rare. New York 1974

Stadt- und Universitätsbibliothek Frankfurt am Main (Hrsg.) : Die Kinderbuchsammlung Walter Benjamin. Frankfurt a. M. 1987

Stadt- und Universitätsbibliothek Frankfurt a. M. und Institut für Jugendbuchforschung an der Johann Wolfgang Goethe-Universität Frankfurt a. M. (Hrsg.) : Die Frankfurter Hobrecker-Sammlung. Kommentierte Bibliographie einer Sammlung alter Kinder- und Jugendbücher. Frankfurt a. M. 1983

Wild, Reiner (Hrsg.) : Geschichte der deutschen Kinder- und Jugendliteratur. Stuttgart 1990

坂井榮八郎『ドイツ史10講』、岩波書店、2003年

佐藤和夫「子どもの本への愛 ——カール・ホブレッカーの『昔の忘れられた子どもの本』から」、平成21年度茨城大学人文学部共同研究ユニット報告書、2010年

高橋順一「ベンヤミンのメッセージ ——希望の倫理へ」、2010年 (<http://chikyuza.net/archives/1570>, 2018.9.12)

野村法『ドイツの子どもの本』（増補新版）、白水社、2009年

ヒューリマン、ベッティーナ（野村法訳）『子どもの本の世界』、福音館書店、1969年

ベンヤミン、ヴァルター（野村修訳）『ヴァルター・ベンヤミン著作集14 書簡I 1910-1928』、晶文社、1975年

三島憲一『ベンヤミン ——破壊・収集・記憶』、講談社、1998年

付記：本稿は2018年4月21日に茨城県立図書館において開催された平成30年度ライブラリー講演「子どもの本を集めた人 ——カール・ホブレッカーの世界から」の講演用原稿の前半部を大幅に加筆修正したものである。

(2018年10月30日受理)

¹¹ ベンヤミン、ヴァルター、前掲書、200頁、一部改変

¹² Michael Mahn : Karl Hobrecker — ein deutscher Sammler. 1987, S.48

¹³ “Geschichte des deutschen Jugendbuches”, Leipzig 1942 (この初版はGraebischの姓で、1951年の第2版は結婚後の姓Dyhrenfurthが併記されてハンプルクから出版された)